

# 知財部門業務の効率化・高度化に向けた AI 活用アプローチ比較検討レポート

**Manus**

## 1. エグゼクティブサマリー

近年、知的財産（IP）部門における業務効率化と高度化の要請が高まる中、生成 AI の活用が急速に進んでいます。特に 2025 年から 2026 年にかけて、AI 技術は単なる文章生成から、自律的にタスクを遂行する「AI エージェント」へと進化を遂げました。本レポートでは、知財部門が「すぐに効果を出したい」という目的に対して、**Manus**（汎用 AI エージェント）、**Claude Code**（コーディング特化 AI）、および知財特化型生成 AI ツールの 3 つのアプローチを比較検討し、最適な導入シナリオを提示します。

結論として、即効性と安全性を最優先する場合は「知財特化型生成 AI ツール」の導入が最も確実です。一方、既存の業務フローを抜本的に自動化し、独自の知財 DX 基盤を構築したい場合は「Claude Code」を活用した社内システムの開発が有効です。さらに、競合分析や広範な情報収集など、定型化しにくい高度な調査業務には「Manus」のような自律型 AI エージェントの活用が新たな可能性を開きます。

## 2. 知財部門が直面する課題と AI 活用の背景

知財部門は現在、グローバル化に伴う案件数の増加と、それに反比例する人材不足という構造的な課題に直面しています [1]。一人あたりの業務負担が増大する中、限られたリソースでいかに高品質な特許網を構築し、事業戦略に貢献するかが問われています。

これまで、特許調査や明細書作成、中間処理といった業務は、高度な専門知識と膨大な時間を要する労働集約的な作業でした。しかし、生成 AI の精度向上により、これらの業務の実用レベルでの自動化・効率化が現実のものとなっています [1]。特に 2026 年現在、AI ツールは単なる検索・要約機能から、自律的に仮説生成や技術探索

を行うエージェント型アーキテクチャへと進化しており、知財業務のパラダイムシフトを引き起こしています [2]。

### 3.3 つの AI アプローチの概要と特徴

知財業務に適用可能な AI アプローチは、大きく以下の 3 つに分類されます。

#### 3.1 Manus（汎用 AI エージェント）

Manus は、2025 年 3 月に登場した自律型 AI エージェントです [3]。ユーザーが設定した最終目標に対し、自律的に計画を立て、複数のステップからなる複雑なタスクを人間による継続的な監視なしに実行できる点が最大の特徴です。

知財業務においては、Manus Browser Operator 機能を活用し、J-PlatPat や USPTO、Espacenet などの特許データベースや学術論文サイトを横断的かつ並行して検索することが可能です [3]。単なるキーワード検索にとどまらず、セマンティック分析を用いて発明の概念を理解し、関連性の高い文献を抽出してクレームチャートやサマリーレポートを自動生成します。また、社内のコミュニケーションツール（Slack や Teams）や技術文書を常時スキャンし、非構造化データから発明の種を能動的に発掘する「データ駆動型の発明発掘」も実現可能です [3]。

#### 3.2 Claude Code（コーディング特化 AI）

Anthropic 社が提供する Claude Code は、ターミナル上で動作するコーディング特化型の AI エージェントです。ファイル操作、コマンド実行、Web 検索、外部ツール連携（MCP）が可能であり、特に「Skills」機能を用いることで、定型業務のワークフローを自動化できます [4]。

知財分野での活用例として、Claude の Skill 機能を用いて特許法第 36 条に準拠した明細書自動生成システムを構築した事例が報告されています [5]。この事例では、請求項 7 項と 75 段落（約 15,000 字）からなる特許明細書を約 1 時間で作成することに成功しており、従来の 1~2 週間という作成期間を大幅に短縮しています [5]。また、Claude 3.7 は欧州特許弁理士試験において、他の主要 LLM を抑えて最高得点（100 点中 55 点）を獲得するなど、高度な論理的推論能力を実証しています [5]。

### 3.3 知財特化型生成 AI ツール

知財特化型生成 AI ツールは、特許実務特有の文書構造や法的要件、膨大な先行技術データベースへのアクセスに最適化された専用システムです。2026年現在、市場には AI Samurai ONE、Tokkyo.Ai、Summaria、Patentfield、Genzo AI など、多数の強力なツールが存在します [2]。

これらのツールは、かつての「単機能型」から、発明発掘から明細書作成、中間処理、無効化書面作成までを一気通貫で支援する「プラットフォーム型」へと進化しています [2]。例えば、島津製作所の内製 AI を外販化した「Genzo AI」は、発明届出業務の工数を 50%削減し、年間 8000 万円以上のコスト削減を実現した実績があります [2]。また、MIXI 知財室では生成 AI の全面導入により、特許出願のリードタイムを最大 40%削減し、少人数で大規模組織に匹敵する業務遂行能力を実現しています [6]。

## 4. 各アプローチの多角的比較分析

知財部門が「すぐに効果を出したい」という観点から、3つのアプローチを以下の表で比較します。

評価項目	Manus (汎用 AI エージェント)	Claude Code (コーディング特化 AI)	知財特化型生成 AI ツール
主な得意領域	広範な先行技術調査、競合分析、非構造化データからの発明発掘	独自ワークフローの自動化、社内システム連携、高度な明細書ドラフト生成	発明発掘～中間処理までの定型知財実務全般、大量文献スクリーニング
即効性	中 (プロンプト設計と検証が必要)	低～中 (Skill 構築や環境構築に初期投資が必要)	高 (導入後すぐに実務利用が可能)
導入ハードル	中 (セキュリティポリシーの整備が必要)	高 (プログラミングやシステム構築の知識が必要)	低 (SaaS として提供され、直感的な UI を持つ)

評価項目	Manus (汎用 AI エージェント)	Claude Code (コーディング特化 AI)	知財特化型生成 AI ツール
カスタマイズ性	高 (プロンプト次第で多様なタスクに対応)	極めて高 (コードレベルで独自の自動化フローを構築可能)	中～高 (ツールにより異なるが、自社データ学習機能を持つものも増加)
セキュリティ・機密性	低～中 (外部アクセスを伴うため、機密情報の入力には注意が必要)	中～高 (ローカル環境やセキュアな API 経由での実行が可能)	高 (国内サーバー運用、データ自動破棄、プライベート環境構築など知財特有の要件に対応)
コスト感	低 (汎用 AI の利用料金に準ずる)	低～中 (API 利用料と開発・保守コスト)	中～高 (月額数万円～数十万円、または年間ライセンス)
必要な専門知識	プロンプトエンジニアリングの基礎知識	プログラミング、API 連携、システム構築の知識	ツール操作の習熟 (知財実務知識は必須)

## 5. 業務フェーズ別の推奨アプローチ

知財業務の各フェーズにおいて、どのアプローチが最も適しているかを整理します。

### 5.1 発明発掘・アイデア検討フェーズ

- **推奨アプローチ:** 知財特化型生成 AI ツール (例: AI Samurai ONE, Genzo AI)、Manus
- **理由:** 開発資料を投入するだけで出願候補を自動提案する特化型ツールが最も即効性があります [2]。一方、社内のチャットツールや議事録など、散在する非構造化データから能動的に発明の種を探し出すような高度な探索には、Manus の自律的な情報収集能力が活きます [3]。

### 5.2 先行技術調査・FTO 調査フェーズ

- **推奨アプローチ:** 知財特化型生成 AI ツール (例: Patentfield AIR, THE 調査力 AI)

- **理由:** 調査の網羅性と精度、ノイズ除去の観点から、専用のデータベースと検索アルゴリズムを持つ特化型ツールが圧倒的に有利です [2]。大量の文献を効率的にスクリーニングし、KPI ダッシュボードで可視化する機能は、汎用 AI では代替困難です。

### 5.3 明細書ドラフティングフェーズ

- **推奨アプローチ:** 知財特化型生成 AI ツール（例: Summaria, Smart-IP appia）、Claude Code
- **理由:** 段階的生成（提案書→請求項→実施例）と多数のチェックルールを備えた特化型ツールが、品質と効率のバランスに優れています [2]。ただし、自社特有の記載フォーマットや厳密なルールを適用したい場合は、Claude Code の Skill 機能を用いて独自の自動生成システムを構築することで、極めて高いカスタマイズ性を実現できます [5]。

### 5.4 中間処理（拒絶理由対応）フェーズ

- **推奨アプローチ:** 知財特化型生成 AI ツール（例: Summaria, Genzo AI）
- **理由:** 拒絶理由通知の自動分析から構成要素対比表、補正案・意見書案の一気に通貫生成まで、特許実務の深いノウハウが組み込まれた特化型ツールが必須の領域です [2]。

## 6. 「すぐに効果を出す」ための推奨導入シナリオ

知財部門が短期間で確実な成果を上げるための導入シナリオを提案します。

### 6.1 即効性重視シナリオ：知財特化型ツールのパイロット導入

最も早く、かつ安全に効果を出す方法は、自社のボトルネックとなっている業務フェーズ（例：先行技術調査、または明細書ドラフト作成）に強みを持つ**知財特化型生成 AI ツール**を 1~2 種類選定し、パイロット導入することです [2]。

- 1 **課題の特定:** 調査に時間がかかっているのか、明細書作成の工数が負担なのかを明確にします。

- 2 **ツールの選定:** 課題解決に直結するツール（調査なら Patentfield、明細書なら Summaria など）のトライアルを開始します。
- 3 **過去案件での検証:** 完了済みの案件データを入力し、AI の出力品質と既存の成果物を比較検証します。
- 4 **業務フローへの組み込み:** AI の出力をそのまま最終成果物とせず、人間による品質チェック工程（Human in the Loop）を必ず設計した上で、実務への適用を開始します [2]。

## 6.2 中長期的高度化シナリオ：Claude Code による独自 DX 基盤の構築

社内にエンジニアリングリソースがある、あるいは外部ベンダーと協力できる体制がある場合は、**Claude Code** を活用して自社専用の知財業務自動化ワークフローを構築するアプローチが有効です。

- 5 **定型業務の洗い出し:** データの転記、フォーマット変換、社内システム間の連携など、ルール化可能な定型業務を特定します。
- 6 **Skill の定義:** Claude Code の SKILL.md ファイルに業務手順を定義し、自動実行環境を構築します [4]。
- 7 **明細書生成の自動化:** 過去の高品質な明細書データをプロンプトに組み込み、自社の技術分野に特化した明細書ドラフト生成システムを開発します [5]。

## 6.3 ハイブリッド活用シナリオ：特化型ツールと Manus の併用

定型的な知財実務は特化型ツールで効率化しつつ、より広範な情報収集や戦略立案に **Manus** を併用することで、知財部門の機能を「管理」から「戦略的ドライバー」へと高度化させます [3]。

- 8 **実務の効率化:** 特許調査や明細書作成は知財特化型ツールに任せ、担当者のリソースを創出します。
- 9 **競合分析の自動化:** Manus を用いて、競合他社のプレスリリース、ニュース、新規特許出願などを毎日自動で収集・要約し、デイリーレポートとして配信させます [3]。
- 10 **技術動向の俯瞰:** 特定の技術分野における特許出願トレンドや主要プレイヤーの分析を Manus に指示し、R&D 部門への戦略的提言に活用します。

## 7. 導入時の注意点とリスク管理

AI ツールを導入するにあたり、以下の点に留意する必要があります。

- **機密情報の取り扱い:** 未公開発明の情報を入力する際は、ツールのセキュリティポリシー（学習データへの利用有無、データ保存期間、国内サーバー運用など）を厳格に確認する必要があります [5]。汎用 AI や Manus を使用する場合は、特に注意が必要です。
- **AI の限界の理解:** AI は「もっともらしい嘘（ハルシネーション）」を生成する可能性があります。特に特許明細書の独立クレーム作成や、技術的なパラメータの正確性については、AI 単独での作成は危険であり、必ず弁理士や専門家による最終確認（Human in the Loop）が不可欠です [5]。
- **教育投資の重要性:** ツールを導入するだけでは定着しません。所内での運用ルール整備と、AI を正しく使いこなすためのリテラシー教育（プロンプト設計など）への投資が、導入成功の最大の鍵となります [1]。

## 8. まとめ

知財部門の業務効率化・高度化において、「すぐに効果を出したい」のであれば、セキュリティと実務適合性に優れた**知財特化型生成 AI ツール**の導入が最適解です。自社の課題に合わせて適切なツールを選定し、人間と AI の協働プロセスを設計することで、短期間で劇的な工数削減と品質向上が期待できます。

一方で、**Claude Code** を用いた独自ワークフローの構築や、**Manus** を活用した広範な競合分析・情報収集は、知財部門をさらに高度な戦略組織へと進化させる強力な武器となります。まずは特化型ツールで足元の業務を効率化し、創出されたリソースを用いて、より高度な AI 活用へとステップアップしていくアプローチを推奨します。

---

## References

- [1] AI 経営総合研究所. (2025). 弁理士業務で使える AI ツール徹底比較 | 特許調査から明細書作成まで活用ガイド. <https://ai-keiei.shift-ai.co.jp/benrishi-ai-tools/> [2] よろず知財戦略コンサルティング. (2026). 特許特化型生成 AI 活用ツールを活かした知財活動指南書. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/0d3e98cb81dbc7b68531.pdf> [3] よろず知財戦略コンサルティング. (2026). 自律型 AI エージェント「Manus」を活用した知財業務の効率化と高度化. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/a436ec102baf530ee907.pdf> [4] Qiita. (2026). Claude Code ですべての日常業務を爆速化しよう!. <https://qiita.com/minorun365/items/114f53def8cb0db60f47> [5] GrIP. (2026). 生成 AI 時代の知財調査実務 2026 記事調査レポート. <https://growing-ip.com/?p=1258> [6] よろず知財戦略コンサルティング. (2026). MIXI 知財部における AI エージェント活用の全貌. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/ad29dab28f5fa4439fde.pdf>